
逆転裁判

矢崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転裁判

【Nコード】

N9118U

【作者名】

矢崎

【あらすじ】

俺はゲイを止める。

恋人の浮気で俺はそう決心したばかりだったのに、当の本人が涙ながらに俺の邪魔をする。

いつだって後先を考えないで被害者ぶる元恋人に、俺はひとつの提案を思いついた。いや、提案じゃない、これは賭けだ。

俺はゲイを止める。今日で止める。きっぱり止める。

その決心を固く握って頭に叩き込んで、落とさないように紐まで付けて、俺は誓った。

明日から俺は、ゲイじゃない。

予定になかった残業に、俺はクタクタだった。花の金曜日だったのに、ついつい後輩の仕事なんて手伝ってしまう。後輩からの好感度はうなぎ昇りだが、俺の体力は急降下だ。もうそんなに若くもないってのに、やっぱり格好なんてつけるもんじゃない。

俺はコートの襟を掻き合わせながら、アパートの入り口にある郵便受けをチェックした。DMばかりで、特に重要なものは無さそうだったので、そのまま通り過ぎる。中身は明日、取ることにしよう。どうせ明日も、DMしか届かないだろうが。

階段を上りながら、部屋の鍵を探す。すぐに出てくるはずだったのだが、今日に限って中々見つからなかった。鞆の奥底のほうに入ってしまったのかと、鞆を大きく開いてその中を覗き込む。

そんなことをやっていたせいで、俺の部屋の前に人影があったことなんて、ちっとも気付かなかった。

「佐久間さん、おかえりなさい」

聞き慣れた声で呼ばれて、ようやく気付く。俺はのんきに鍵を探していた手を止めて、弾かれたように顔を上げた。

「……おかえりなさい」

俺の視線の先には、寒さで鼻を真っ赤にした、少しぼっちゃりした青年の姿があった。

もう二度と見ることは無い、と思っていた、一週間前までは恋人であった男である。

俺はしばらく呆然とその姿を見ていたが、やがてはつと我に返った。はにかむように笑う相手の姿を見て、自然、舌打ちが漏れる。その舌打ちを聞いて、相手は笑顔を少し悲しそうなものに変えた。「何、やってんだよ。家の前で待たれたら、迷惑だとは思わなかった訳？」

手のひらを振って、どけ、と合図しながら俺は言った。ずかずかと歩いて行って、相手を押しのけ部屋の扉の前に陣取る。

しまった、まだ鍵を見つけていない。

こういうときはさっさと家の中に入ってしまったいのに、俺はまた、鞆の中の鍵を探さなくてはならなかった。

「ごめんなさい。でも、佐久間さん、携帯に出てくれないし、どうしても連絡が取りたくて」

鞆をあさる俺の前で、泣きそうに笑っているこの男の名は、木下浩幸という。

本人によれば某私立大学の学生で、まだ19歳だそうだった。俺からしてみりゃ結構な年下だが、末っ子気質なのか甘えたがりの性格が可愛くて、付き合っていた頃は結構上手くいていた。

上手くいつてる、と思っていた。

「そりゃそうだ、着信拒否してるんだからな。俺はお前と連絡を取る気なんて無い」

「……ねえ、話をしようよ。僕、嫌だよ。このまま別れるのだから」

重ねられた浩幸の言葉に、俺の鍵を探す手の動きが乱暴になる。中々見つからなかった鍵がようやく見つかって、俺はちよつと安心した。それを鍵穴に突っ込みながら、俺は浩幸に言う。

「俺はこのまま別れたいんだよ。お前、今更俺に何を言う気だ？もういいからさっさと帰れよ、もう遅いだろ」

真っ赤になつた鼻が、ちよつと痛々しい。一体、いつから待つていたんだろうか。

想像しかけて、俺は慌てて首を振る。浩幸に同情したところで、何も始まらないのだ。

俺は鍵を開けた部屋の中に入り、さっさと扉を閉めようとする、今度は浩幸がその扉を掴んできた。

「お願いだから、ちよつとくらい話を聞いてよ！　ねえ、そうじゃないと、僕納得できないよ！」

浩幸が必死の形相で言い募ってくる。俺は舌打ちをして、閉めようとした扉を逆に押した。扉に押されて、浩幸はバランスを崩し、咄嗟に扉から手を放す。その隙に、俺は扉を閉めてしまった。がちゃり、と敢えて大きな音がするように鍵を閉める。

「帰れ。お前と話することなんて、もう何も無い」

「僕にはあるんだよ！　ねえ、開けてよ！　お願いだから！」

扉の向こう側から聞こえる浩幸の声を背に、俺はずるずると玄関に座り込んだ。だだでさえ残業で疲れてるっていうのに、浩幸のおかげでそれが倍増した。ネクタイを緩めながら、がりがりと頭を掻く。その間も、浩幸の声は絶えず聞こえていた。

「開けてよ、話を聞いてよ！　三十分、ううん、十分でいいから！　悲壮っぽい声を出しながら、扉を叩くことをしないのが、浩幸らしいと思う　そして、こんな男同士の痴話喧嘩を、堂々とやろうとするところが、さらに浩幸らしい。

俺は眉を顰めながら、浩幸に負けぬ声で叫んだ。

「うるさいんだよ！　近所迷惑になるのが分からねえのか！？」

一瞬、幸彦の声が止む。息をのんだような気配が、こちらまで伝

わってきた。

「ごめん……でも、このままじゃ、僕だつて帰れないよ……」

そして、搾り出したかのような声。

それっきり浩幸は黙り込んでしまったが、その気配が扉の前から消えることはない。俺は「クソッ」と小さく漏らして、また頭をガリガリと搔いた。何だかいたたまれなくて、しばらく逡巡した挙句、結局は扉の鍵に手をかける。

「……入れよ」

俺が自分から扉を開けてやると、浩幸は嬉しそうな顔をした。涙の跡が頬に残っているが、こいつは前から涙腺の緩いやつだった。いかにもお涙頂戴の映画でも、馬鹿なんじゃないかと思うくらい簡単に泣きじゃくる。

そんな浩幸が可愛いつて思ってたのも過去の話だが、俺はやっぱ、浩幸には甘いらしい。

結局は拒みきれずに浩幸を中に入れてしまったことを後悔しながら、俺は一つ、溜息を吐いた。

コートを脱いで、ストーブを点けようとそちらのほうを見る。すると、同じくすでに上着を脱いしまった浩幸が、先に点けてしまったようだった。何度もここに来たことがある浩幸だから当然と言えば当然なのだが、恋人同士であった時と何一つ行動を変えない浩幸に、俺はちよつと不快になる。

「話って何なんだよ。もう一度やり直そう、なんて話なら聞かねえからな。十分で終わるんだろ、さつさと言えよ」

勝手にベッドに腰掛けた浩幸に、俺は不機嫌も露わにそう言った。一応は、身体が冷えているだろう浩幸にコーヒーでも入れてやろうと、台所に向かう。どうせインスタントコーヒーくらいしか無いが、

浩幸は味音痴なので気にすることもないだろう。

「うん……あの、香川さんのことなんだけど」

浩幸が出てきた名前に、俺は思わず、用意していたマグカップを落とした。幸い、シンクに落ちたので割れることは無かったが、自分の動揺は隠せない。

そいつの名は、俺の中では今、一番の地雷だった。

「僕のせいで、香川さん、佐久間さんに絶交されたって言ってたから……香川さんは笑ってたけど、僕、申し訳なくて……」

「……だから、何なんだよ」

俺は落としたマグカップを握りしめながら言った。コーヒーを入れてやるうなんて殊勝な気分は、一気に吹っ飛んだ。

俺はシンクを思い切り片手で殴りつけて、浩幸のほうを振り返った。怯えたような浩幸に構わず、俺は浩幸を睨みつける。

「ああそうだよ、俺と香川が絶交したのは、お前のせいだ！ ごめんなさいって謝れば、それで済むとも思ってたのか！？」

そういえば、こんな深夜に近所迷惑だったかな。俺も浩幸のこと、言えねえじゃん。

そんな言葉が、頭の隅っこの冷静な部分に過ぎった。だが頭の大半を占める興奮した部分は、そんな言葉はどうでもいい、と判断する。

「で、でも、僕は……佐久間さんのこと、まだ好きだから……。香川さんには本当に、悪いことをしたって思ってた……だから、せめて、佐久間さんとは仲直りしてもらいたくて……」

視線の先にいた浩幸は俯いていて、握り締めた拳を両膝の上に置いていた。俺はマグカップを置くと、キッチンから出て浩幸のほうに歩み寄る。浩幸の前に仁王立ちしてみたが、浩幸は相変わらず俯いたままだった。

「俺が、香川と、はいそうですかって仲直りできるって、本気で思

ってるのか？」

俺は浩幸に言い聞かせるように、一言一言区切りながら言う。

「お前、自分が何したか、分かってるのか？」

そこまで言った時、浩幸はようやく顔を上げた。目に涙を一杯に溜めながら。

ついこの間まで、俺と浩幸は恋人同士で、俺と香川は親友同士だった。

俺がまだ自分の性癖を認められずに悩んでいた頃、初めて出来たゲイ友達が、香川だったのだ。

俺は養子で、いつも良くしてくれる養い親にはとても感謝していたが、それだけに自分がゲイであることが申し訳無かった。

子供が出来ないために俺を引き取ってくれた養い親は、俺くらいの子供がいるには少し年老いていて、孫の顔を見るのを楽しみにしている。俺から見てもお人好しが過ぎるくらいの両親だから、彼らを説得しようと思えば説得できないことは無いと思う。

だが、ゲイの息子がいるという事実が、養父母にとって良いように働くはずがない。きっと世間の反応は冷たいものだろうし、世話になった養父母をそんな目に合わせることはさすがに申し訳無かった。

俺はそのことで、恋愛するなんて気分じゃないくらい悩んでいた。そのまま恋愛なんてしなけりゃ、まあ性癖を隠すも何も無くなるんだが、それはそれで問題だろう。

そんな時に知り合ったのが、香川である。俺は1人暮らしを始めただけの頃で、ようやくゲイの集うバーか何かに顔を出せる年頃になっていた。俺たちはそこで知り合って、お互いにバリタチとい

うこともあり、恋愛関係に発展することなく、友情を育んでいったのだ。

俺は、悩みを相談もした。香川はマスコミ関係に勤めていて、俺より3つ年上だった。どちらかというと保守的な俺とは違い、いつも何がより優れているかを考え、冒険を厭わない香川は、俺の今まで友人たちとは全く違って新鮮だった。目からウロコが落ちるような助言をしてもらったことも何度かある。

俺と両親の問題については結局、根本的な解決策は出なかったけど、香川のお陰で俺はとりあえず自由に恋愛できるくらいには悩みを脱却できたのだった。

俺たちは何回か他の恋愛を繰り返しながら、連絡が途絶えることもなく、ちよくちよく一緒に飲みに行ったりしていた。

俺は両親の問題があるので、一生を連れ添うような相手を見つける気は無かったし、香川は奔放な性格故か、あまり恋愛の長続きしないタイプだった。お互い仕事の愚痴を漏らしたり、今の恋人についてのおろけあたり、何も気兼ねすることなく色んなことを話し合ったものだった。

そして、そこに俺の恋人である浩幸が加わったのは、本当について最近のことだったのだ。

浩幸は丁度、俺が1人暮らしを始めた頃と同じ年齢で、ちよつと不安そうに辺りを見回す様子が何だかとても可愛く見えて、守ってやりたくなった。香川が同じ年頃の弟を持っていたのは知っていたし、話に聞く弟の性格が浩幸とよく似ているようなので、浩幸を香川に紹介しようと思ったのは特におかしいことではなかったと思う。

勿論、俺と香川は、パツと見は全然違うが、根本的な嗜好は一緒だったりしたので、紹介するのはちよつと危険かもしれないとは思

いもした。だが、香川は親友の恋人を奪うような男じゃないと信じていたし、浩幸にしたって、こんなに俺を頼りにしてきている男が、俺を裏切ったりするはずがないと信じていた。

それが間違いだったと気付いたときには、浩幸と香川は、すでに関係を持っていた。

その事実を知らされたのは香川からで、宣戦布告に近い形だったと思う。香川は熱しやすく冷めやすいタイプなのだが、本人にその自覚が無いものだから性質が悪い。

当然、俺は怒ったし、香川はそれを真正面から受けて立った。俺は自分の恋人を取られた形となった訳だが、浩幸が香川になびいたことよりも、香川が俺を裏切ったことに激昂したんだと思う。俺はいつでも、香川を絶対的に信頼していたから。

俺と香川はそうして、一生に一度つくくらい激しい喧嘩をしたのだが、話をさらにややこしくしたのは、もう1人の当事者である浩幸だった。

俺はてつきり、浩幸はすっかり香川に惚れていて、二人でよろしくやっていると思っていたのだが、浩幸はそうでは無いという。自分は今でも俺のことが好きなのだ、と、腹立ち紛れに痛烈な嫌味と別れの言葉を述べた俺に、涙ながらに訴えてきたのだ。

俺はやっぱり、猛烈に怒った。一生に一度だと思ってた怒りを、立て続けに二回も経験してしまったのだ。浩幸が俺を裏切ったことにも腹が立ったし、香川すら裏切っていることにはさらに腹が立った。俺はその怒りに任せて、浩幸の弁解なんか一言も聞かなかったし、連絡さえも受け取らなかった。

そして俺は、こんなに面倒で腹が立って悲しいことが起こるなら、ゲイなんてやめてやると固く決心した。気力と体力と財布の中身を削って合コンにも参加したし、慣れないお世辞を齒が浮くほど言っ

たりした。俺は普段が真面目だったことが幸いしたのか、いざ女の子を相手にしてみるとそれなりにモテた。

だから、女の子とちよくちよくデートをしたりして、人生に軌道修正をかけてやろうと計画しているのだが。

今この状況のように、必死に連絡を取ろうとしてくる浩幸の影が、俺の生活の上にちらほら見えてくるのだった。

「……もう、いいんだよ。俺はもうお前とも香川とも関係無い。そのうち可愛い女の子と結婚して、実家の両親を安心させてやるさ。そんなときに、痴情の纏れで大喧嘩するような、みっともないゲイの知り合いなんていらねえんだよ」

俺は目に涙を一杯溜めたつきり、何も言わない浩幸に業を煮やしてそう言った。舌打ちを漏らすと、浩幸は言葉が咄嗟に浮かばないのか、金魚みたいに口をパクパクさせている。

「佐久間、さんは……女の子でも、平気なの？」

だが、ようやく浩幸の口から出た言葉は、この場に不似合いなくらい間抜けなものだった。浩幸にはこういう、場の雰囲気を読まないところが大いにある。一人っ子だと言う話だし、たくさんの大人に甘やかされて育ったのだろう。

「別に俺は、お前と違って突っ込まれなきゃいけないなんてことは無いんだよ。女の前でも刺激さえされりゃ勃つし、突っ込んじまえば男だろうと女だろうと気持ちよくなれるさ」

そして、俺はそんな浩幸に対して、クソ真面目に応えてしまう。今まで甘やかしてきた癖が残っているのだろうか。

俺は女の子は可愛いとは思うが、犬猫に対して可愛いと思うのと同じで、欲情はしない。だが、刺激さえ与えれば目を瞑ってるつも

りでセックスはできるのだ。そんなことでは相手の女の子に失礼なのは分かっているのだが、今の俺はそれを気にすることができないほど荒んでいるのも、また事実である。

「……そんなの、幸せじゃないよ」

そして、それを自覚しているからこそ、浩幸に指摘されたくなくてなかった。

俺はまた浩幸を睨みつけたが、浩幸はやっぱり俯いてしまった。浩幸は困ったことがあるとすぐに俯いてしまう癖を持っているが、人と目を合わせずに非難するのは、とても卑怯だと思う。

「俺が幸せだと思ってたものは、お前がブチ壊してくれたからな。お前、それだけしか言いたいことがないんなら、もう帰れよ」

そんな浩幸から、俺自身も目を逸らした。俺たちの行く末と同じで、どうせ浩幸と俺の目は、もう合いなんてしないのだ。

俺が吐き捨てるようにそう言っても、浩幸はなかなか立ち上がるうとはしなかった。早く出て行けと、わざとらしく舌打ちをしてみても効果は無い。

「……ねえ、僕、やっぱり佐久間さんが好きだよ」

そして、浩幸は立ち上がる代わりに、俺の怒りのツボを突くような台詞を、また漏らしたのだった。

「お前、俺はそんな話聞く気なんて無いって、何回言ったと思ってるんだ！？ 俺を怒らせたいだけなら帰れよ、俺はお前なんかにつける暇は無いんだよ！」

「だって好きなんだから仕方ないじゃないか！」

俺が苛立ったように叫べば、浩幸も今度は言い返してきた。まだ目に涙は溜まっていたけれど、ちゃんと顔を上げている。自分の言葉の勢いに背中を押されるように、浩幸は言葉を続けた。

「佐久間さん、どうして僕の気持ちが分からないの！？ 好きな人から一方的に別れられて、納得なんてできる訳ないじゃないか！」

「ああ、分からないさ！ 俺に分かるのはな、昨日まで恋人と親友だった奴らが、翌日には裏切り者とその浮気相手になってた俺の気持ちだけだ！」

「だからそれは、話を聞いて欲しいって言ってるんじゃないか！」

俺と浩幸は、しばらく無言で見詰め合った 睨み合った、というべきなのかもしれない。

そして、先に口を開いたのは、やはり浩幸である。

「……だって、香川さんが、佐久間さんに恨まれてもいいから、僕と付き合いたいって言うって……僕のせいで佐久間さんと香川さんに喧嘩して欲しくなかったし……そんなこと止めてって香川さんに言ったら、僕と寝ればもう諦めるって言うって……だから僕、香川さんと寝たのに……」

浩幸は必死に、俺に訴えかけるように言った。

「香川さんは佐久間さんの大切なお友達だから、僕、傷つけたくなかったし……香川さん、凄くいい人だし、これっきりだって言うてたから……なのに、香川さんが、やっぱり諦められないって言うてきて……」

そんな浩幸を、俺は冷静に見つめようと努力した。

「香川さんがこの事を佐久間さんに言うなんて、そんなの、僕だっと思ってなかったんだ。そのせいで佐久間さんと別れなきゃいけないなんて、思ってたんだ……」

だけど、やっぱり無理だった。

「だから、お前は何が言いたいんだ？ 僕は悪くないから、俺に許して欲しい、とでも言いたいのか？」

もつとちゃんと、内容を考えてから言おうと思っていたのに、浩幸を責める台詞が勝手に口から飛び出した。

「なあ、事実をちゃんと見ろよ、事実を。俺に分かるのは、お前が俺を裏切って、香川と寝たって事実だけなんだよ！ お前は自分の意思で香川と寝たんذار、俺が怒って当たり前だと思わないのか！？」 お前は、俺がお前のためだって言いながら、他の奴を抱いても構わねえのか！？」

浩幸は俺の台詞に息を飲み、そのまま押し黙ってしまった。ベッド脇にある目覚まし時計の秒針の音だけが静かに響き渡る部屋の中、俺は俯いてしまった浩幸をじつと観察する。

そして、やがて浩幸は震えた声を出した。

「……佐久間さんが、そうしたいって言うなら、僕は我慢する」

俺はその言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ赤になっていた。

気がついたときには、赤くなった頬を押さえた浩幸が、信じられないものを見るような目で俺を見ていた。俺の手はじんじんと痛くて、その痛みに初めて、自分が浩幸を殴ってしまったことに気付く。

「お前は結局、何が言いたいんだよ！？ 良いセックスフレンドでいましょーね、とでも言いたいのか！？ それなら、好きにその辺うろついてこいよ、俺はお前みたいなのにつき合うのはごめんだ！」

だが、浩幸を殴ったショックを感じていたのとは別の場所で、浩幸をひどく責め立てる俺がいる。

俺は勢い良く扉のほうを指差すと、浩幸に帰れと何度も言った。浩幸の目にあふれていた涙は、とうとう筋を作って頬を滑っていく。俺は浩幸に縋られては振り払い、浩幸は俺に振り払われては縋りつく。

「佐久間さん、僕は佐久間さんじゃないと駄目なんだよ！僕は佐久間さん以上に、誰も好きになんかなれない！」

「うるさい！そんなことを軽々しくポンポン口に出すから、俺はお前を信用できないんだ！」

「だってそうなんだから仕方がないじゃない！僕は佐久間さんが好きなんだ、今だって、これからだってずっと愛してるんだ！」

浩幸の顔は、涙と鼻水でぐちゃぐちゃだった。浩幸はそんなことにも気付いてないようだったし、俺だって興奮してたから気にもならない。ただ俺は、浩幸をやつとのこととで振り払って、荒い息を吐きながら浩幸を見下ろした。尻餅をついてしまった浩幸が、捨てられた犬のような瞳で俺を見上げている。

そこで、ふと俺は、自分の中の何かが、ぷつりと音を立てて切れてしまったような気がした。

「お前、そんなに俺が好きだって言いたいのか？」

突然ひどく冷たい目に俺に、浩幸は一瞬、怯んだようだった。

「……そ、そうだよ。僕は佐久間さんと、別れたくなくて、ない…

…」

尻すばみな声ではあるけど、浩幸はそう言い返してくる。俺はわざとらしい程ゆっくりと、浩幸の言葉に頷いた。

「……へえ？」

そして、おもむろに浩幸のほうへ足を踏み出す。

「じゃあ、俺を抱いてみるよ」

俺の突然の台詞に、浩幸は訳が分からなかったらしく、キョトンとした顔をした。俺はそんな浩幸の間抜け面を、相変わらず冷たい目で見つめる。

「そんなに好きだってんなら、お前、俺のこと、抱けるだろ？ お前だって男だろ、今までは飾りモンの役にも立たなかったかもしれないが、立派なイチモツだって付いてるさ」

俺は踏み出した足を、まっすぐに浩幸のモノに目掛けて降ろした。そのまま体重をかけると、浩幸は痛みに顔をしかめる。ぐ、と喉に詰まったように漏れた呻き声は、俺に対してなのか痛みに対してなのか。

「それとも、突っ込まれてアンアン言わしてくれない俺なんかは、もう好きじゃないってか？」

俺は浩幸が、バリネコで今まで誰も抱いたことがないことを知っている。『人の中に入るって、何だかどうしても怖くて……誰かを抱こうと思っても、勃ってくれないんです。誰かに抱いてもらうほうが、安心するんです』と、ちよつと照れくさそうに言っていたことを覚えている。

黙ってしまった浩幸に、俺はさらに畳み掛けるように言った。

「抱いてみるよ。俺が、そんなに好きなんだったらな」

俺だってバリタチで、他人に主導権を握られるなんてごめんだっただ。

だが、浩幸がそこまで覚悟を決めてくるんだったら、俺だって抱かれてやってもいいかもしれない。尤も、それは浩幸が乗ってこないだろうと思っているからこそ思えるのかもしれないが。

「さあ。どうすんだよ」

どっちにしろ、この目の前で泣いている浩幸が、決めないことは始まらない。

俺が好きだって言うなら、俺と幸せになりたいって言うなら、甘ちゃんで先の事を考えない浩幸にも、それなりの覚悟をしてもらわなければならない。

俺が問いを重ねると、浩幸はやがて、決心したように口を開いた。

「ぼ、僕は……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9118u/>

逆転裁判

2011年7月18日21時39分発行